
晋・恋姫†無双

司馬雛乱達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晋・恋姫†無双

【Nコード】

N9319Z

【作者名】

司馬雛乱達

【あらすじ】

お試し版、晋・恋姫無双の連載版

お試し版との変更点

- ・主人公司馬懿の口調
- ・幼少期の描写
- ・藍川護の登場予定など

そのふざけた幻想・・・受け入れます(泣)

「貴方の名は聖歌よ」

「あぶあぶ？あうあ？（えっ？えっ？何の事っすか？）」

目が覚めると俺は黒髪赤目の美女に抱きあげられて名を付け入られていた。

……はあ？！

意味が分からねえぞ。

もしかしてコレって転生、とかいうやつか？だとしたら俺は死んだのか……。

まあ、たいして思い残すことはなかったし、こうして転生できたんだから良しとするか。

それにしてもなんか俺の名前って女みたいだな…。

「聖歌あゝ、どこへ行ったの？出てきなさい」

あの意味の分からないことから三年経ったのです。

今、私は姉の愛歌お母様から隠れているのです。

えっ？口調が違う？

それはですね、私はどうやら女の子に転生していたようなのです。

……それでこの口調は愛歌お母様に教育された結果なのですよ……
……Yesしかない選択肢がこれほど辛いものだとは知らなかった
のですよ。

ああ、それとどうやらここはあのエロゲー……えーっと、恋姫無双の
世界らしいなのです。

恋姫って確か有名どころの英雄が女体化してるとかいいうやつだった
と思うのです？

まあ、その恋姫に転生したのですよ。

それで私が隠れているわけはこの子に有るのです。

白い毛並みに紅い瞳、そして体から噴き出る妖気。つまり私は妖獣
の子狐を抱きかかえているのです。

というのも私が庭で遊んでいるとこの子が現れて一緒に遊んでくれ
たのです。それでこの子が私に付いてきたので私はここでこの子を
内緒で飼っているのですよ。

かれこれ四日前の話です。

まあ、それはさておき自己紹介をします。

私は姓は司馬、名は懿、字は仲達、真名は聖歌なのです。

そう！なんとあの三国志で魏の軍師で西晋の礎を築いた司馬仲達な
のです。これには吃驚したのですよ。

そしてお母様は言わずもがな司馬防、あと六つ年上のお姉様に司馬
朗、一つ年下の妹に司馬孚がいるのです。お姉様の真名は風歌、妹
の司馬孚は蘭歌なのです。

いきなり転生してさらに女体化、その上司馬懿とか頭がおかしくな

りそうだったのです!!

それにこの体は無駄に廃スペックでして一度見たものなら絶対に忘れず自分の物にしてしまおうとか、どれだけ無茶をしても疲れないし、大岩を片手で持ちあげたり、粉碎したり出来るんですよ、何の苦もなく、なのです。

意味がわからないのですよ。

確かに私がこの世界で生きていくには強い体が必要不可欠ですし、史実道理にならないために曹操対策とか必要だと思うのです。私、曹操嫌いなのですよ。

まあ、恋姫の世界では出番なかったと思うので問題ないと思うのですけども不安は残るばかりなのです。

「あっ！ やっと見つけたわよ、聖歌。こんなところに隠れていたのね」

どうやら母様に見つかってしまったようなのです。

「何してたのかしら？」

「えと、な、なにもしてないのですよ？」

「嘘でしょう？ 今なら起こらないからお母様に何を隠しているのか教えてもらえないかしら？」

うう、お母様はにっこりほほ笑んでいるのですがその顔にはしつかりとした怒気を感じられます。

……………こわいですよお。

「……そう、ならいいわ。そうね、聖歌がきちんと自分でお世話できるとこの子を飼ってもいいわ。でもできなかったら……お仕置きよ♪」

「（ビクビク）は、はい」

お母様に事情を説明すると飼うことを許してもらったのですよ！！

ふっ、私の手にかかればお母様もちよいもn「聖歌!!」なっ！
 ? 心が読めるというのですか! 何と言う事なのです。この鬼婆が読
 心術など使えるなど悪夢でしかないのですよ!!

「聖歌あり、ちよつとこつちに來なさうい」

ヒィ！お母様、その怒り顔のせいでただでさえ怖いお顔がさらに怖くなっているのですよ！！

「お仕置きね♪」

[illegible]

その後、司馬防の部屋から幼い少女の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか。

あつ、あの子の名前は玉藻に決めたのですよ。

そのふざけた幻想・・・受け入れます（泣）（後書き）

とりあえずアンケート

お試し版で登場したトリッパー、藍川護を登場させるかさせないか。
期限は四話投稿までで

司馬懿、司馬徽に会う

「私は姓は司馬、名は徽、字は徳操、真名は蒼歌よ。よろしくね？」
「ひゃ、ひゃい。私は姓は司馬、名は懿、字は仲達、真名は聖歌でひゅ、よろひゅくおねぎやいしましゅにやのでひゅ!!」

あうあう、噛んじゃったのですよう。
初めて会う人だから緊張するのです。
あうあう。

「好々。聖歌ちゃんは礼儀正しいですね、好々」

あうあう、と、とりあえず落ち着くのです、私！

「あ、それで蒼歌さん。ここはどうなると思うのですか？」

「好々。ここはですね、こうやれば……」

あれから約十分間混乱した後、蒼歌さんの声でやっと私は落ち着いたのです。

いやあ、まさか私が人見知りするタイプだったとは……。

今まで屋敷の外に出たことなかったし、知らない人に会ったのは初めてだったから気付かなかったなのです。

まあ、それはさておきなのです。

今、私の目の前にいるのは司馬徽こと蒼歌さんなのです。

それで私は今、この廃スペースクな肉体を生かして曹操から逃げために勉強しているのですよ。

それにしても、さすが水鏡先生なのです。

教え方も上手いし、知識も豊富なのです。それに物凄くスタイルのいい美人さんなのですよ！！

私もこんな女性になりたいのです。

残念ながらお母様は美人ですが胸は無に等しいのですよ。

ざまあ見ろ、なのですよ。

それで何故、私が蒼歌さんと会っているかというところと今日たまたま家に來ていた蒼歌さんにお母様が私の勉強を見てほしいと言ったからなのです。

私ももっと武だけでなく知も欲しかったので私からもお願いしたのですよ。

すると蒼歌さん好々と言って受けてくれたので蒼歌さんが帰ってしまいうまでにできるだけその知識を吸収しているのです。

とりあえず今は知を高めるのです。

正直なところ武はお母様が使っていた氣というものを完全に習得した為に特別することがなくなってしまったのですよ……。

ちなみに氣は前にお母様が私の心を読んでいたですよ？アレが氣らしいのです。

お母様が言うには氣とは人間だけでなく全ての生物が持っており、確か生命力が物質化したものらしいのですよ。

氣の応用次第では一騎当千の武を誇ったり、あらゆる怪我や病を治癒したり、天候を操ることなどが可能なのです。

まあ、氣の話はこれくらいにするのですよ。

それよりも私に新しい妹が出来たのです。

名は司馬馮、真名は琴歌なのです。

これで司馬八達の内、四人が生まれたのです。行動を起こすのはまだまだ先ですが、ある程度の計画を決めておかなくてはならないのです。

その計画というのが晋帝国の建国なのです。

晋を建国すればいかに曹操だろうと我ら司馬一族に手を出せないなのです。

うざいのですよ、アイツは！！

まあ、ここで怒っていても意味はないのです。とりあえず今は知をこの国、いや世界一くらいにまでしておきたいのです。

普通に考えればありえないかもしれませんがこのチートスペックな肉体なら絶対とまでは言えないのですが、世界一の頭脳になれそうなのがするのですよ。

司馬懿の覚悟

「きゅ？きゅう！！」

「待つのですよ、玉藻お」

どうも、司馬懿なのです。

今日は家の裏にある山で玉藻と遊んでいるのです。

あれから一ヶ月間蒼歌さんに色々教えてもらったのですよ。

それでもやはりたった一月じゃあまり多くの知識が吸収できなかったので氣を使って蒼歌さんの知識を丸ごと記憶しましたのですよ。

蒼歌さんも氣の膜を張ってあらゆる干渉から守られるようにしていたようなのですが、私にかかればこんなことは簡単なのです。

でも、勝手にこんな事をしたのには少し…いえかなり心が痛むのですよ。

ですが！これは晋建国の為に必要な事なのですよ。でも、蒼歌さんの莫大な量の知識は全てもらったので知の方でもする事が無くなってしまうので退屈だったのですよ。

私はまだ人や動物を殺した事はないのですが、単純な武力だけならお母様にも勝てます。氣の扱いは完全に制御できたといってもさす

がにお母様には勝てなかったのですよ。

風歌姉様には勝てるのですけど。

なんでも年期が違う、そうなのですよ。

このチートの塊である私を氣の制御だけだといっても優れているお母様は凄いのです。

あと、怒っている時のお母様の戦闘能力はチートボディな私を小指で捻り潰すほど強いのです。

私以上の化け物なのですよ（ガクガクブルブル）。

「きゅう！」

「やっと捕まえたのですよ、玉藻。ここら辺はお母様が入っちゃいけません、って言っていたから帰るのです」

「きゅう？きゅう、きゅう！！」

「？どうしたのですか？玉藻」

「きゅう！」

本当にどうしたのですか、玉藻は。

はっ！もしかして、頭がおかしくなってしまったのですか？！た、大変なのです！すぐに家へ帰って獣医に見せなくては！

「きゅう！きゅう！」

「だ、大丈夫です、玉藻。たとえばあなたの頭がどうなろうと私は貴方を見捨てませんのです!!」

「きゅう?きゅう!!」(怒)

「ふえ?な、何で怒っているのですかあ。わかりまs「グオオオオ」
…へっ?」

私が後ろを振り向くとそこにはとても大きな熊がいました。

「すぐく…大きいのです…」

「グオア!」

「ひゃい!ご、ごめんなしゃい!」

「きゅ、きゅう!!」

はっ!そうでした。

こんなことしている場合じゃないのです。

早くこの熊から逃げないと!!

「はあ、はあ、せ、精神的に疲れたのですよう」
「きゅう」

いくら私が疲れを知らない超人でも精神的には疲れるのです。
ですが、あのまま玉藻が教えてくれていなかったらどうなっていたかわからないのです。ありがとうございます、玉藻。

でも、すっかり道に迷っちゃったのですよ。辺りには樹しか見当たらないのです。

どこですか、ここは？

こ、これはまたしてもピンチかもしれないです。

それにそろそろ日が暮れてきたのです。

このまま動くのは危険なのです。

はあ、またお母様に怒られるのですよう。

「きゅう？きゅう、きゅう」

「ありがたいのです、玉藻。私を慰めてくれるのですね」
「きゅう！」

玉藻は二足で立ち上がり、私の頭をなでてくれたのです。

さすが、玉藻です。

とっても紳士です。女の子なのですけどね…。

あれから私は山の中で玉藻と一夜を共に過ごしました。

…：…なんか、とても卑猥に聞こえたのですよ…。

それはともかく下山なのです。

さっき日が昇ったばかりなので変な道をいかねければ山から下りられるはずなのです。

はあ、お母様に怒られるのですよ。

「っ!?!」

と、そんな事を考えていると私に向かって毛むくじらの大きな腕がとんできたのです。

私はすぐさま玉藻を抱きかかえて横へ交わします。

攻撃した方を向けばそこには昨日私と玉藻を襲った大熊がいたのです。

「グオアアッ」

「っち! しつこいのでしすよ!」

大熊の攻撃を私は右へ左へ受け流す。

熊襲撃からもう一刻も経ちます。それでも私がこの熊を倒せないわけ……それは…

「怖い、のですよ…」

恐怖、この感情は全ての生物に置いて最も優先的に働く感情ではないかと私は思うのですよ。

それに私はあの熊そのものに恐怖しているわけではないのです。

私は……生き物を殺すという行為が怖いのです…。

この世界で三年生きましたが、それでもたった三年です。

命の危険がほとんどない平和な世界で生きてきた者としては他の生き物を殺すのがたまらなく怖いのです…。

「グオッ!」

くそッ！このままじゃ、私どころか玉藻までやられてしまうのです。そんなのは絶対に嫌なのです。

だったら、私が今すべきことは…

「覚悟を決めること!!!」

「グオ？」

[illegible]

私の右ストレートが熊の腹に決まり、熊は弾け飛ぶ。

危機は去ったのです。

だから、だから……

「聖歌！！」

「ひっぐ、お、お母、さ、ま、うえ、うう、あああああああああ
ああん」

泣いても、良いですよね……………？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9319z/>

晋・恋姫†無双

2011年12月30日13時46分発行